

会 議 記 録			
会議の名称	予算特別委員会（全体会）		会議場所 全員協議会室 担当職員 鈴木
日時	令和2年3月16日（月曜日）		開 議 午後 1 時 00 分 閉 議 午後 4 時 16 分
出席委員	◎福井 ○竹田 長澤 三上 富谷 浅田 大塚 平本 田中 並河 山本 木村 赤坂 三宅 松山 小川 奥野 小松 藤本 木曾 西口 菱田 石野 <齊藤議長>		
執行機関出席者	桂川市長、石野副市長、仲山副市長、神先教育長、山内市長公室長、浦企画管理部長、田中生涯学習部長、柏尾総務部長、由良環境市民部長、河原健康福祉部長、高橋こども未来部長、吉村産業観光部長、並河まちづくり推進部長、関まちづくり推進部事業担当部長、吉田会計管理室長、阿久根上下水道部長、佐々木市立病院管理部長、片山教育部長、山本財政課長、石田総務課長（欠席：玉井病院事業管理者）		
事務局出席者	山内事務局長、井上次長、船越副課長、鈴木議事調査係長、佐藤主任、山末主査		
傍聴	市民0名	報道関係者2名	議員0名（－）

会 議 の 概 要

13:00

〔福井委員長 開議〕
〔事務局長 日程説明〕

〔市長等入室〕

1 予算審査 (1) 市長質疑

番号	事業名	論点
1	移住・定住促進経費	「離れ」にのうみは観光振興施設へ切り替えるべきとした決算特別委員会事務事業評価結果が反映されていないが、今後の事業運営の見通しは。
2	その他（市政運営全般に関して）	頻発する自然災害やコロナウイルスなどにより、突発的な財政出動や税收減が想定される中、持続可能な財政運営についてどのように考えているのか。また、市民福祉の増進のために重要な諸課題の優先順位をどのように考え、第5次亀岡市総合計画にどのように反映させるのか。
3	文化振興経費	かめおか霧の芸術祭について、市民が理解し、市民に感動を与えられている事業なのかという声があるが、市長が目指す方向性は。

4	地域交流促進経費 (社会福祉費)	NPO法人に委託して実施している隣保館デイサービス事業において、これまで指摘要望してきた実費負担分の使途が明らかにされないのはなぜか。また、今回、プロポーザルを行った結果についての所見は。
5	ふるさと学習推進経費	京都スタジアム・大河ドラマ館等見学に係るバス運行経費について、既存の教育効果のある教材を使う時間が確保できていない中で、この事業にどの程度の効果があるのか。また、コロナウイルスの影響により、今後、授業時間数の不足が見込まれた場合、事業実施について柔軟に対応する考えは。
6	環境先進都市推進事業経費	①FLY BAG生産に係る拠点整備について、今後の事業展開の構想は。 ②プラスチック製レジ袋の提供禁止に関する条例施行に向けたシンポジウムの実施について、メンバー構成や実施方法は。
7	子ども・子育て支援経費	子どもの貧困の連鎖を断ち切る取り組みを推進するため、全庁横断的なプロジェクトチームを立ち上げるとのことだが、プロジェクトチームの具体的な体制と取り組み内容は。
8	農業担い手づくり育成事業経費	①家族営農等の小規模農家や新規就農を振興するために、予算をしっかりと計上することが重要であるが、どのように考えているのか。 ②安心して農業を行えるように、総合的にマネジメントできる人材が必要だと考えるが、今後どのような対策を図るのか。
9	林業担い手育成事業経費	林業の担い手不足により放置山林が目立っているため、森林環境税等を有効に活用し、林業に携わりやすい環境づくりが大切になってくる。防災の観点からも、健全な山林の保全が求められるが、今後どのように林業の担い手を育成し、山林を保全していくのか。

《答弁》

＜桂川市長＞

1 移住・定住促進経費

亀岡市移住・定住促進施設「離れ」にのうみについては、移住・定住の促進、観光振興及び地域の活性化を図ることを目的に、平成30年11月から運用している。昨年9月の決算特別委員会事務事業評価時においては、まだ、移住体験利用者の実績がなかったことから、観光振興施設へ切り替えるべきとの評価結果をいただいたが、現在では、徐々に利用が増加してきている。3月13日時点で18名の利用があったこの施設については、来年度から指定管理者制度を導入するが、導入後も引き続き、市の施策として移住体験利用を進め、移住促進のための活用を図っていきたい。また同時に、施設の効果的運用を図るために、観光客等の宿泊利用も進めていきたいと考えている。今後については、当面の間、現在の所管で引き続き移住・定住施策の充実に取り組み、その実績を鑑みて、観光施設としての運用が適切であると判断した場合は、所管替えをしたいと考えている。なお、今後も「離れ」にのうみの運用については、移住

希望者に向け、情報発信や相談対応、補助金制度等ほかの施策と連動しながら、移住促進を積極的に推進していきたい。

2 その他（市政運営全般に関して）

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う対策や、災害復旧事業等の突発的な財政需要が発生しても、市民の皆様が安全・安心に暮らしていただけるように、持続可能な財政運営を行うことは、極めて重要であると考えている。そのためには、経常的な経費を含めた事務事業のスクラップ・アンド・ビルドをさらに徹底し、こうした不測の事態に備える財政調整基金の確保に努めるとともに、ふるさと納税でお寄せいただく寄附金の一部を財源として保有することも必要だと考えている。そのため、令和2年度当初予算案においては、ふるさと納税による寄附金約7億円のうち、各事業に充当するための繰入金を約4億5,000万円計上し、その差額約2億5,000万円については、ふるさと力向上基金に積み立て、将来的な財政需要に備えている。今後も、人口減少等に大幅な税収が見込めない中、少子高齢化に伴い、社会保障給付費が増加する等、厳しい財政状況が続くと見込んでいるが、市政運営において、市民の生命と暮らしを守ることが最優先であると考えており、これからの10年についても、将来にわたって持続可能な財政運営を図ることを基本に、現在策定中の第5次亀岡市総合計画にしっかりと反映していきたいと考えている。

3 文化振興経費

かめおか霧の芸術祭について、市民が理解し、市民に感動を与えられる事業なのかという声があるということだが、かめおか霧の芸術祭は、期間を定めて行う作品展ではなく、人々の感性を育み、暮らしを豊かにする通年の取組として考えている。いわゆる絵画等の作品だけを芸術と捉えるのではなく、生命や魂をより一層輝かす技術のことを芸術と捉えている。この芸術という視点から、新しい切り口で市の施策にアプローチすることにより、亀岡の魅力を再発見するきっかけになると考えている。また、亀岡市の地域課題を解決する役割を担いつつあるとも考えている。本年度は環境とアートという視点で、KAMEO KA FLY BAG Projectを実施した。本市が実施しているプラゴミゼロの取組を幅広く浸透させるためには、誰もが分かる取組が重要である。アートの力で環境の取組を、FLY BAGという作品で、皆さんにお届けすることにより、違う視点から環境問題を提示することができたと考えている。令和2年度は、そのほかにも地域の直売所と連携した農とアートの事業や、小学校でのアートプログラムの実施、KIRI CAFE周辺で行うマルシェにおいて地域の人と協働したブース等、かめおか霧の芸術祭をハブに、亀岡ならではの物や人が分野横断的につながり、交流できる仕組みづくりや、循環的な経済圏や新たなコミュニティの形成をさらに推進したいと考えているところである。また、これまで芸術祭の拠点となる千歳町のKIRI CAFEでの事業を中心に行ってきたが、令和2年度には亀岡駅周辺の城下町エリアで、その地域の商店や空き家を活用した事業を、地域の人たちと進めていきたいと考えている。かめおか霧の芸術祭は、亀岡にゆかりのある芸術家の皆さんと出会い、その豊かな感性を亀岡市のまちづくりに役立てていきたいという思いから始まった。今後、芸術家の皆さんとのネットワークを大切に育て、その感性を生かしたまちづくりを進めていきたいと考えている。

4 地域交流促進経費（社会福祉費）

隣保館デイサービス事業において、受託事業者であるNPO法人が、参加者から実質負担金を徴収していたことについては、NPOと参加者との関係性の中で、委託内容に含まれていない独自のサービス、これはお菓子や飲物等の提供ということもあったが、委託業務そのものはきちんと履行されており、特に問題なかったと考えている。しかし、NPOの独自サービスとはいえ、同一事業の中で参加者のために行われたことが、かえって紛らわしいことになっており、令和元年度からは参加費を徴収しないように指導した。また、事業者の選定方法については、当該事業が人権問題を解決するための隣保館事業の特別事業であり、京都府内で委託契約をしている隣保館デイサービス13カ所のうち、12カ所が過去の実績等から、1社随意契約を行っているところである。私自身が、NPO側に議会の指摘要望事項を伝え、事業の透明性を確保するために、令和2年度から公募型のプロポーザル方式を採用することにした。公募型プロポーザルを実施するにあたり、今年2月18日から3月5日までの間、公告を行い、市ホームページで広く公募した。結果として、企画提案いただいたのは、NPO亀岡人権交流センターのみであり、3月12日に企画提案の審査会を行い、内容審査を進めており、内容が適正であれば、再入札の必要性はないものと考えている。特に透明性を高めることを含め、事業者と私が2度ほど直接お会いして話をして、公募型のプロポーザルに変えてきたので、よろしくお願ひしたい。

6 環境先進都市推進事業経費

今年度実施したKAMEOKA FLY BAG Projectは、廃棄予定のパラグライダー等の生地を回収して解体し、パッチワークのように縫製することで、軽量性、耐久性を備えたエコバッグとして生まれ変わらせようというものであり、環境と芸術の連携により生み出された。これは、使い捨てプラスチック削減を目指す新しいプロジェクトである。令和2年度では、楽天クラウドファンディングで集まった寄附金を活用し、かめおか霧の芸術祭実行委員会に助成することで、このFLY BAGの生地づくりの拠点整備による事業化支援を進めていきたいと考えている。今後は、このプロジェクトが地域に雇用を生み、収益も見込むことができる自立的かつ持続可能な地域事業として、また、環境・経済・社会の3側面でのイノベーションを生み出す事業の確立を目指し、事業の展開を図っていききたいと考えている。次に、プラスチック製レジ袋の提供禁止に関する条例の制定・施行をはじめ、かめおかプラスチックごみゼロ宣言の具現化を目指す取組については、市民、事業者の理解は必要不可欠である。そこで、シンポジウムの実施にあたり、10分の10の事業である、一般財団法人自治総合センターの環境保全促進助成事業を活用し、多くの関係者が意識を共有できる企画を検討していききたいと考えている。具体的な企画内容については、世界に誇れる環境先進都市かめおか協議会の参画団体をはじめとして、多角的な視点で意見をいただきながら、協議調整を図っていききたい。また、実施時期については条例施行に合わせ、最も効果的な時期を見極めながら進めていきたい。現時点では、まだ構成メンバー、実施日は決まっていない状況である。

7 子ども・子育て支援経費

子どもの貧困対策については、その対策が行政のあらゆる施策に関連することから、全庁横断的な組織で対応する。具体的には、教育部門と福祉部門を中心

に、全庁的なプロジェクトチームとして体制を組織するとともに、地域で子育て支援や貧困問題に取り組んでいただいている団体や、有識者の方々等、様々な関係者の参画を得ながら、取り組んでいきたいと考えている。プロジェクトチームでは、子どもたちの生活や行動実態、また、保護者の生活実態等を調査することとしており、子どもの将来に影響を与える事象を把握し、貧困の連鎖につながるリスクの発生状況を確認していく。また、これらの情報を分析する中で、効果的な子どもの貧困対策計画を策定し、子どもたちが生まれ育った家庭の経済・社会状況に関わらず、未来へ希望を持ち、自立する力を伸ばすことのできる環境整備を図りたいと考えている。

8 農業担い手づくり育成事業経費

小規模農家や新規就農者支援のために、水田を活用し京野菜等の畑作物に対する交付金等、所得向上を支援するとともに、農業次世代人材投資事業等、国や府の補助制度を活用し、しっかりと予算計上しているが、今後は、家族営農等の小規模農家に対する支援についても、国・府に対し要望するとともに、市としても補助制度等の支援策を検討していきたいと考えている。また、農政関連予算だけでなく、新規就農者の居住対策として、移住・定住関係予算等も含めて、多方面からの支援をしていきたいと考えている。安心して農業を行えるよう、総合的にマネジメントできる人材が必要だと考えるが、今後の対策については、現在、担い手専任マネージャーを設置し、営農技術の指導や農地の権利取得の指導等、様々な角度から支援しているところであるが、引き続き、府の農業改良普及センター等の関係機関と連携し、認定農業者や営農組織等とも協力しながら、助言や指導をしっかりと行いたいと考えている。

9 林業担い手育成事業経費

森林は、国土の保全、水源の涵養、地球温暖化の防止、木材をはじめとする林産物の供給等の多面的機能を有しており、このような機能を持続的に発揮していくには、森林の適正な整備、保全を推進していく必要があると考えている。このことから、林業の担い手である森林組合の育成並びに林業就業者の人材育成及び安定雇用に係る補助制度により、林業関係者の労働環境改善に努めている。今後においては、本年度からスタートした森林経営管理制度を活用し、森林経営の行政関与を強めることで、森林経営の集積・集約化を図ることにより、林業経営の高い生産性と収益性を実現させ、経営の安定、林業の従事者の所得向上、国土保全につながると考えており、これらの森林管理においては、担い手である林業経営者の充実や新規参入者の育成が必要であり、国・府とも連携する中、林業後継者や林業就業者育成のためのスキルアップ支援等、担い手の充実に努めていきたいと考えている。

<神先教育長>

5 ふるさと学習推進経費

本年1月11日に、青少年の夢や憧れの舞台、スポーツを通じた健全育成拠点でもある北中部地域のゲートウェイとして、サンガスタジアム by KYOCERAが完成し、にぎわい創出の拠点として、麒麟がくる京都大河ドラマ館がオープンした。そこで、本市の子どもたちが夢を持ち、ふるさと亀岡を誇りに思うとともに、本市ゆかりの明智光秀公を身近に感じ、歴史、文化の学習に役立つ目的で、サンガスタジアム等を見学してもらうように考えたものがある。し

かし、4月以降、新型コロナウイルスについて、どのようになるのか見通しが立たない状況であり、まずは感染拡大防止対策について、しっかりと対応していく所存である。また、学習計画や学校行事の時期、内容の変更等、様々な課題に対応するため、本事業については、学校とも連携を図り柔軟に対応していきたいと考えているが、このような体験をする機会はなかなかないものであり、子どもたちがふるさと亀岡に誇りと愛着を持ってもらえるよう、社会科副読本「わたしたちのまち亀岡」も有効に活用しながら、学習環境を整え、この事業の実施に向けて取り組んでいきたいと考えている。

13:24

《質疑》

＜福井委員長＞

質疑は項目順に一問一答方式で行う。

1 移住・定住促進経費

＜木曾委員＞

決算特別委員会以降、移住・定住について積極的に取り組まれており、3月18日現在で18人の利用があった。そもそも、移住・定住促進の経費であった以上、本来は我々が指摘する前に、決算の段階で報告すべきではなかったのか。取組に対して、反対しているわけではないが、この「離れ」にのうみについては、もう少し、観光は観光として進め、移住・定住促進施設に本当になり得るのかも含め、点検いただきたい。あの施設を撤去すべき、取り壊すべきだと言っているのではない。本来の目的である観光としてやっていくべきではないのか。補助金等の関係があったので、やむを得ずこういう形になったと思うが、将来的に市長の判断として、1～2年で判断できるものであるのか。

＜桂川市長＞

「離れ」にのうみについては、移住・定住促進施設という大きな側面を持ちながら、一方で、それだけでは到底、運営できる状況にならないので、観光客にも多く利用いただいているところである。もう1つ、「離れ」にのうみは城下町の西堅町にあるが、今、どんどん町屋が壊されていく状況の中で、リノベーションすることにより、これだけ魅力的なものになるということ、市民に見てほしいと思っている。そういう目的のある施設であり、亀岡祭の時には、お客さんがいない部屋をオープンにして、市民に見ていただいております。昔ながらのあの建物が生かされ、地域の雰囲気を含めて、再現できたことは、地域からも喜んでいただいていると思っている。しかし、現状として、基本的に地方創生の交付金をいただき、移住・定住促進という形でやらせていただいたので、今の思いとしては、来年度から指定管理にする予定であるが、3年くらいの状況を見る中で最終判断し、それでも移住・定住が伸びないのであれば、移住・定住者の利用制度は残しつつ、観光施策に切り替えていくように考えていきたい。もう少し見守っていただきたいと思うので、よろしく願いしたい。

＜木曾委員＞

今、市長が言われたように、町屋保存や観光に関しては、私もそれでよいと思っている。しかし、移住・定住を促進するためには、本来、移住・定住を促進している地域の中に施設を用意し、そこに住み、地域の人とも関わる中で、亀

岡のよさを知っていただくのが、本来の形ではないかと思う。町屋再生と観光を合体したことに、無理があったのではないか。地方創生の交付金を確保し、事業を展開されることについては納得するが、今後、2～3年の間に、最終的な判断をするということであり、それぞれの所管で、調整いただく中で、きちんと整理することが大事だと思うがどうか。

<桂川市長>

この2～3年を目安にしたいと思っているが、その時点までに、そのような状況があまりないようであれば、所管替えも含めて考えていきたいと思う。しかし、移住促進特別区域において、このような施設を設けるのは大変厳しい状況もあるので、まずは亀岡というまちを知っていただくためにも、拠点を1つ置いておくことは、それなりに意義があると思っているので、ご理解いただきたい。

2 その他（市政運営全般に関して）

<木曾委員>

頻発する自然災害や新型コロナウイルスにより、国や地方自治体においては、財政的な部分を含め、非常に厳しい状況にある。特に新型コロナウイルスは、本当に収束できるのか。どういう状況になっていくのか、我々も見通しがつかないのが現状だと思っている。市長が推進されているふるさと納税は、非常にたくさんいただいている。市長に使い道を委任されている寄附金に関しては、今後の市政運営に関わる全般的な問題もあるので、市民福祉増進のためにも、積み立てが必要になってくると思う。2億5,000万円ほどの積み立てを今年も考えているということだが、今後、さらに上乗せしていただき、できる限り、一般財源が必要な部分に手厚くできるようにしておかないと、なかなか厳しい状況になると思っている。

<桂川市長>

減収になると思っている。実質、令和2年度は昨年度の実績が税収として上がってくるので、令和3年度に税の減収が響いてくると思っている。そのことを見据えて、令和2年度には、基金として2億5,000万円余りを積み立てられるように考えていきたいと思う。無駄を排して事業を精査し、取り組んでいきたい。

<木曾委員>

昨年度の実績が今年の税収になることは分かっている。今年度の市民や企業の収入が非常に厳しい状況になると考えている。それをトータルで考えると、税収が実際には入らないことも、これからは当然予測されると思っている。基金を一定積み増ししておけば、一般財源を活用する事業に関しては、かなり運用できるのではないか。市民の皆さんの健康や福祉に関して、きちんとした手立てができるのではないかという思いの中で申し上げている。市民も企業も同じであるので、そういう厳しい部分が、今年度はもう目の前に来ているのではないか。そこを理解いただき、積み増しをよろしくお願ひしたいと思う。

<桂川市長>

令和2年度には、いろいろな意味で新型コロナウイルスが影響してくることが考えられる。ふるさと力向上寄附金は、7億円プラスアルファをいただく予定だが、スクラップ・アンド・ビルドを含めた事業の見直しを含め、この状況で

は下がる可能性があることも踏まえ、しっかりと対応していきたい。

<木曾委員>

重点施策をしっかりと考えていただき、第5次亀岡市総合計画に盛り込んでいただくようお願いしたい。今の状況が世界恐慌と言われることになった場合、本当にとんでもないことになる。国もしっかりと地方自治体を支える立場であると言われており安心しているが、備えあれば憂いなしである。財政状況としても自主財源をしっかりと確保することが、永続的な地方自治につながるようになる。市長の手腕を発揮いただくよう、よろしくようお願いしたい。要望とする。

<三上委員>

今のこの突発的な状況については、言われたとおりだと思う。令和3年度の税収が、2年度の実績で跳ね返ってくることもよく分かる。その上で、今年はターゲットイヤーであり、チャンスだということで、攻めの施策がたくさんあるように思う。しかし、来年以降、ターゲットイヤーが終わった後、どのように持続可能な市政をつくっていくのか。今後10年の施策の大枠は、第5次亀岡市総合計画で方向づけをしていくが、この1年間で考えていかなければならないと思う。いろいろな分野にも関係してくるが、にぎわいの創出や、市のアピールとして必要なことがあると思うが、今後はそれらを絞っていくことを、第5次亀岡市総合計画の中で色づけしていかなければならないと思う。プラゴミゼロの目標の設定が10年になるので、大変な10年になると思うが、第5次亀岡市総合計画に関わり、努力していくことについての見通しを聞きたい。

<福井委員長>

第5次亀岡市総合計画の予算ではないが、総合的なことであり答弁をお願いしたい。

<桂川市長>

新型コロナウイルスがどのような状況になるかによっても、大きく変わってくると思う。令和3年からそれにより進めていくことになるが、今は、第5次亀岡市総合計画を策定中であり、最終段階の調整に入っている。今年の状況、特にこの1～2カ月の状況を見る中で、その判断をしていかなければならない。今後10年を見据える中では、人口減少、少子・高齢化は、より顕著に表れてくる。拡大志向の行政では成り立たない状況にあると思う。今、新型コロナウイルスによる世界同時株安も含めた危機が来ていることを踏まえ、今後、第5次亀岡市総合計画の中に盛り込みながら、亀岡市としては、今年をターゲットイヤーとして、いろいろな事業を進めていく予定にしている。これも、新型コロナウイルスの感染状況に応じて、方向性も変えていかなければならない。今も、サッカーを含め、スタジアムでの行事が中止になっている状況にあり、我々も大変危惧している。しかし、市民にとっての安全・安心と福祉向上については、なくすわけにはいかない。最優先で予算化していかなければならない。予算配分においても、最低限必要なものと、プラスアルファの部分でどういう調整ができるかということ、今後しっかりと考え、財政状況を見る中で進めていきたい。第5次亀岡市総合計画にも、そういうことを含め、今後の状況に応じて、しっかりと対応を盛り込んでいきたい。

<西口委員>

今までの流れを見ていると、ふるさと納税は本当に、確たる財源の1つだと考える。私たちは、20～30億円を目指していくことを提言してきた経過があ

る。天童市は将棋の駒のまちであり、どれだけ地場産業の返礼品を出せるかを見ていた。意外にも33億円という、かけ離れたふるさと納税を集めたという情報も提供したところである。あの財源を市長は半分ぐらい自由に使えるが、厳しい財政運営の中で、数字的に何%を積み立てる計画であるのか。それを当て込んだ予算編成は、非常に危険だと思っている。次から次へと事業を展開されようとしているのか分からないが、将来を見据えた中で、健全財政を維持していくためには、基金の積立てのあり方は非常に大事なことだと思っている。想定として、市長は何%ぐらいを常に残しておきたいと考えているのか。

<桂川市長>

財政調整基金については、いざというときに亀岡市として最低10億円は必要であり、その財源を基金として積み上げることを1つの目標にしている。それを基に、今年度は10億円を上積みできるよう、ふるさと力向上寄附金を活用し、市長が市民とともに進めるまちづくりに充てていくことを考えている。2億5,000万円くらいは積み足したいと思っている。西口委員が言われたように、寄附の何%かについては、現在、具体的には考えていないが、令和2年度に本当に7億円プラスアルファができるかどうかというのは、社会情勢によっても変わってくる。それを必要な予算に組み込むのではなく、いつでも削減できるといったら語弊があるが、縮小できるようなものにするを含め、財政課でそれを調整する中で、取り組んでいる。そういう面では、引き続きこの新型コロナウイルスを含めた日本、世界の経済の減退という状況を見据える中で、しっかりと対策を取る必要があると認識しており、今後対応していきたい。

<西口委員>

今、新型コロナウイルスの関係で、世界の経済が非常に危機的状況になるというのは、想定内にはしていると思うが、次年度は非常に厳しい状況になると思う。そういった意味から、これからの財政健全化は、相当力を入れていかなければならない。非常に厳しいことがもう明らかになってきている状況であり、この1年、しっかりと取り組んでいただきたい。

<桂川市長>

ご指摘のとおり、厳しい状況になることが推測されることを踏まえ、財政出動、そして今後の基金を含めた予備的な備蓄も考えながら、しっかりと事業を進めていきたい。

<藤本委員>

今は、市税100億円を維持しているが、人口減少が進んでいくので、それもどこまでもつのか。厳しくなると思う。天童市では、ふるさと納税の返礼率が5割であったので30億円になった。現在はもう国の基準の3割に戻したので、10億円と少しくらいになり、減ってきている。市長が言われた7億円プラスアルファ、もしくは目標20億円が安定的になり、毎年2億5,000万円程度を着実に財政調整基金に積み上げていけるような、ふるさと納税の対応が非常に大事になってくると思う。

<桂川市長>

基本的にふるさと納税は、寄附者が何に対して寄附するかを優先しなければならないと思う。亀岡市では、今、6つの項目がある。その中に「市長が市民とともに進めるまちづくり事業」という項目があり、そこに寄附をいただいた中から、基金への積立てを考えていかなければならない。亀岡市も、

7億円プラスアルファ、将来的には20億円を目指して、新たな戦略を立てながら進めてきているので、多くの寄附をいただけるようになった時には、しっかりと基金に積み立て、いざというときに活用できればと考えている。

<福井委員長>

新型コロナウイルス対策について、今後、国や府がどういう対策をされるかわからないが、亀岡市独自で何かしようということではないと理解してよいのか。当初予算には当然上がっていないが、どのように判断されているのか。

<桂川市長>

新型コロナウイルスについては、今、国においても、いろいろな意味で、補助制度を含めた取組を模索されている。しかし、まだ現状として、具体的にその内容が下りてきていないので、その情報をいち早く入手して、できれば補正予算を編成するように考えていきたい。時期がどうなるかということもある。まだまだ、状況が刻々と変化しているので、国においても経済対策、子どもたちへの対策、そして雇用も含めた労働者に対する対策も新たに模索されている。いち早くそういう情報を入れて、市民に対して助成できる体制づくりに努めていくので、今後とも議会においても緊急の場合は、お願いすることがあると思うので、よろしくお願ひしたい。

3 文化振興経費

<浅田委員>

亀岡の霧はマイナスの自然現象であったが、プラスに捉えて千歳町を中心に行ってきたKIRI CAFEを、今後は地域を広げていくという答弁があった。ガレリアかめおかで行われたが、市民には現代アートが、分かりにくい観点があることから、若い芸術家の皆さんが亀岡を一緒に盛り上げようと、霧を題材に市民の皆さんに広げ、今後も実施されると思っている。予算は増額されている。若い芸術家の皆さんは、公金によって自分をアピールしていく芸術家が多いという感じもする。それが世の中の状況である。次年度はしっかりと時間をかけて、芸術家を選任いただきたい。市民に対して、もっと分かりやすい芸術祭につなげていただきたい。今後、こういった形で芸術祭や選任が行われるのか。

<桂川市長>

亀岡市が霧の芸術祭を始めた理由は2つある。1つは、亀岡の文化度をどのように上げるかである。オリンピック・パラリンピックはスポーツの祭典であり、スポーツと文化の振興がうたわれるようになった。そういったチャンスにチャレンジをした。もう1つは、亀岡から山を越えれば、京都市立芸術大学や嵯峨美術大学、京都造形芸術大学があり、亀岡にアトリエを持ち、住んでいる関係者が多かった。そういった方々、約30名近くにお会いしてきたが、その中から霧の芸術祭が生まれてきた。今まで行政には、芸術との接点がなかった。文化財はあっても、芸術的な文化はあまりなかった。感性が優れた地元のアーティストの方々とともに、亀岡の文化度を高めていくことや、芸術が地域の課題を少し解決する取組に力を貸していただくことが、この芸術祭によって始まった。亀岡駅北広場には、5,000万円から1億円する作品をつくる地元在住の芸術家から作品を寄附いただいた。これも霧の芸術祭の成果の1つである。亀岡高校の学生など、これから芸術家を志す人

たちや子どもたちとのコラボを含め、人を育てることにも、霧の芸術祭が関わっていくことになる。そして、京都府の補助金を充て、亀岡市が委託することにより、京都造形芸術大学がKIRI CAFEの運営を行っている。一般的に、芸術祭は何千万円、何億円のお金をかけて芸術家に作品をつくってもらい展示するが、亀岡市では1,000万円である。そして、京都府、国から補助金をもらいながら、全体的な枠組みをつくっている。1,000万円で芸術祭をやっているところはないと思っている。瀬戸内国際芸術祭であれば10億円近いお金がかかっている。作品をつくって展示するというよりも、芸術家とのネットワークをつくり、そこから地域の課題を解決する取組であるKAMEOKA FLY BAG Projectや、やおやおや、農業マルシェなどの取組を行っている。令和2年度は、亀岡の旧城下町を中心に、空き家や公共施設を活用し、作品発表の場をつくっていこうと考えている。芸術家に直接お金を出していることはない。公金を使って自分の作品を展示いただく取組が主なものであり、しっかりと理解いただきたい。農業者や新たな移住者がこの芸術祭をとおして交流を広げ、活動を発表する取組になっていることは大変ありがたい。これが、亀岡の魅力につながっていく。若い方、行政施策に関わったことがない方々に賛同いただき、新しい視点でこういった事業ができたことは評価できると思う。農業者と芸術家がコラボし、また、環境と芸術家がコラボすることで、違った側面からそれぞれの魅力を発見できる機会になったと思っている。つかみどころのない芸術祭と思われるが、京都府ともしっかりと連携し、国がオリンピック・パラリンピックに合わせた制度を設け、亀岡市が活用する形で、亀岡の文化向上に取り組んでいるところである。

<浅田委員>

スポーツ・文化振興を発展させることは大変よいことである。霧の芸術祭は、今後も芸術家と一緒に盛り上げていき、市民に分かりやすいようにしていただきたい。亀岡高校とのコラボも興味深いところであり、若手の芸術家を育てるという意味で、亀岡市としてしっかりと取り組んでいただきたい。霧を土台に亀岡の環境、農業の発展につながるように力を入れていくことが亀岡市として重要だと思う。今後も期待している。

<松山委員>

芸術家の発掘もあると思うが、文化度を上げるため、亀岡市民のためになることが基本条件である。亀岡市をアピールする観点もある。亀岡市としての一定のゴールはどのように考えているのか。

<桂川市長>

亀岡市としてのゴールは、市民が、文化が変わってきたと実感できるようになる環境をつくることである。身近なところで、霧の芸術祭をとおして新しい出会いがあったり、新たな文化を享受したりすることである。いろいろな体験を含めた取組ができるようなワークショップを実施している。それにより市民の参加度が高まることにつなげていきたい。来年度はKAMEOKA FLY BAG Projectを具現化していく予定である。新たな拠点をつくり、障がい者にも参加いただきながらFLY BAGをつくり、世界にアプローチしていくことにつながっていく。1年後には、亀岡に霧の芸術祭があることを市民が実感していくことになると思っている。また、外の人から

亀岡を評価してもらえることにつながると思っている。幅広い取組を霧の芸術祭で実施することができる。霧の芸術祭に関わる人たちが、その取組を紹介することにより、国立美術館でFLY BAGが展示されることとなった。霧の芸術祭は、人と人とのつながりが核分裂を起こして、新たな取組が生まれてくる。まさに芸術の力であると感じており、KAMEOKA FLY BAG Projectも注目されることになり、今後、やおやおやを含め、農業との関わりも新たな展開を迎えることを期待している。結果として移住・定住につながっていくことを考えている。もともと多くの経費をかけられるとは思っていないので、経費は最小限でしっかりと管理して進めていきたい。

<松山委員>

市民としては新たな魅力の発見や、やおやおやなど対外的にアピールすることについては、亀岡市のフラッグシップになると思う。しかし、農業者が求めているのは本当にそこであるのか。実態調査はされているのか。霧の芸術祭でアンケートを実施されたが、2,000人のうち、75人しか回収できなかった。回収率が大変低くて心配する。アンケートを見た結果どう思われたのか。

<桂川市長>

アンケートの取り方にもよるが、少なかったということはある。内容については、よい評価があった。マルシェのアンケートで、2,000人のうち1,000人は亀岡市外から来られた方であった。関心のない人には、まだそこまで受け入れられていないと感じている。底辺を広げていくことが、今後の課題だと思っている。参加型のワークショップを積極的に取り入れながら、市民の皆さんが実感できる取組にしていかなければならない。

<松山委員>

市民からは、何をやっているか分からないという声をよく聞く。文化度を上げるのであれば、文化人に補助金を1,000円、2,000円でも出せば文化向上につながるという意見も聞いている。芸術家の発掘も、亀岡の未来を見据えた中で、大変必要なことであり、霧の芸術祭の核になっていると思う。市民に理解してもらえないが、地域課題を解決するために、霧の芸術祭をハブとしてやるのであれば、民間がやってもよいレベルなのではないか。それに対して、亀岡市がサポートするのは一定分かるが、行政が先頭に立ってやっていくのはいかがなものか。

<桂川市長>

民間レベルでやってもらえればよいのだが、今まで亀岡でそのようなことがあったのか。芸術家は自分の作品づくりが主であり、他と連携しようとはしない。行政がまちのために、皆さんの能力や技術を提供してもらえるような呼びかけをしたからこそ、そういった取組が始まった。今の段階では、行政が担うしかないと思っている。芸術家にもネットワークができアートボンチなど、喫茶店と芸術家のコラボが広がっていけば、その時には行政は手を引いて民間に移譲していくことが必要になる。そこまで引き上げていきたい。今の段階では、まだそこまで至っていない。

<松山委員>

おおむね理解した。地域課題として引っかかるのは、農業振興の担い手不足である。今、事態は深刻だと思っている。猟友会もそうであるが、担い手が

なかなかいない。地域課題を解決しようと考えているのであれば、芸術という観点から触れてもらいやすくして、どうすればうまくいくのか、畑を回って現場の意見を聞くことである。例えば、生産したものが生産者、市民の元に返ってくるような施策に取り組んでいただきたい。

<桂川市長>

農業でもいろいろなものがある。霧の芸術祭に関わっている農業者は、新規就農者で、無農薬やオーガニックに関心のある方が集まって来られている。集団営農されているところが関わっているのではない。むしろ、個人で魅力的な生産物を作りたい人や、新規就農して新たな分野でがんばりたいという人が集まっている。これからのニーズに合った農業を展開していきたい人が芸術家とのコラボレーションを求めて参加されている。マルシェも有機栽培や自然農法、エコ農業をされている人が自分たちの農産物をアピールしに来られている。マルシェでも平均4,000円を使ってもらっており、一般的なマルシェとはまったく違う。6次産業の加工品も含め、そのような状況である。亀岡は京阪神への流通がよい所にあり、亀岡で農業をしたい人が増えてきた。農地も持たずに亀岡で農業をしようとして来られている人が多い。その人たちをどう支援するか。エコ農業を含めた野菜を、亀岡のふるさと納税の主力の返礼品として使っていきたい。これがうまくいけば、亀岡で新規就農したい人が増えていくことを期待している。その人たちを行政としてどのようにサポートできるか。霧の芸術祭だけではなく、農業施策としてやっていかなければならないと思っている。

<小川委員>

当面はアートと環境、アートと農業という取組を考えているのか。

<桂川市長>

環境をどのような形で市民に浸透させているかという面で、アートと環境のコラボによるFLY BAG Projectが生まれてきた。時代を先取りした農業者を応援したいと考えていて、そのような取組がこれから始まっていく。ドイツにはクラインガルテン、ロシアにはダハチャという、週末に農業をする制度がある。このような取組を来年度に目指していきたいと思っている。魅力的な農山村の景観を芸術の力によって創造していきたいという意見が実行委員会にはある。それを含め、これからの環境と農業をよりいっそう魅力的なものにしていくために、来年度はこのコラボレーションが進んでいくことになる。

<小川委員>

市内にはすばらしい芸術家がおられるので、横断的な取組もしてほしい。地域と連携する基本を大切にして、実行委員会にその思いを伝え、さらによりものにしていただきたい。

<桂川市長>

地域との連携、コラボが大変重要である。この事業を広げることが、それにつながっている。令和2年度は亀岡の城下町を1つのエリアに見据え、H商店街や周辺の空き家を活用しながら、魅力的な亀岡の新たな側面を芸術によって浮き彫りにしていきたい。

<木曾委員>

いろいろなことをやりすぎたために、つかみどころがなくなったと言われた。

広げすぎて何を主としてやっているのかが見えなくなったと思っている。最初、霧については、亀岡の観光から出発されたと思っていた。悪いことではないが、環境、経済、教育、農業など、いろいろな分野に広げすぎてしまい、ポイントがずれてきたのではないかと。市長は、広げていくことが芸術家を育てることと言われるが、市民からは何をしているのかと聞かれることが多い。セーフコミュニティと同じように、一生懸命によいことをやっている。しかし、なかなか広がらない。市民に浸透しない。結果として何をやっているのかということになる。あまりにも手を広げると、そういうことになってしまわないかと心配する。芸術家を育てることも必要かもしれないが、市民が亀岡の霧をどう受け止めるかということである。また、それを売りにして、観光にしようという最初の発想に戻り、スタートするのが分かりやすいのではないかと。500万円増えるが、一体どこに消えていくのか。環境や教育は、それぞれの取組を持っている。市民に対しても分かりやすく、柔軟にできるような形が望ましいのではないかと。また、行政がどこまで関わっていくのか。ほかの所では何十億円もかけているのだからという発想になってしまうと、どんどん膨らむ可能性もあるので、視点を狭めて取り組むのがよいと思うかどうか。

<桂川市長>

霧の芸術祭の根本は、観光を主眼には置いていない。一方で、霧のイメージを変えることは大変大事なことである。1つは亀岡の文化度をどのように上げるかということである。2つ目は、亀岡に縁がありアーティストとして素養のある人たちを人材として、宝として生かしていくということである。それがうまくいけば、外から見に来てもらえるようになり、観光にもつながると考えている。幅を広げすぎたというよりも、市民協働としてやっている。実行委員会の中で、こういった取組ができないかということで、市民や芸術家の意見により、課題を解決していけるように、農業や環境とコラボすることが始まった。それが結果的に広がったということであれば、そのとおりにかかもしれない。来年も2月に行う予定であるが、霧の芸術祭本編の発表が一番の中心である。KIRI CAFEという拠点があり、若い芸術家の新しいいろいろな取組が始まっている。それを総括すると、つかみどころがない、広くなりすぎていると思われるが、亀岡市としては市民協働の取組として、文化度も上がりつつあると思う。1つの成果として、亀岡駅北に芸術家から作品を寄附いただくことにもつながっていくことだと思っている。今後、のべつ幕無し広げていくことにはならないようにしていかなければならない。予算的にも、これ以上大掛かりな予算を投じるつもりもない。新型コロナウイルスやいろいろなことを考えたときに、一番早く予算が削られる場所になるであろうと、私も認識している。その辺をしっかりと対応する中で、取り組んでいきたい。

<木曾委員>

忌憚なく言われたので、私はそれでよいと思うが、芸術家が育っていくきっかけを市長が提案していただいたことは、素晴らしいことだと思う。それが財政や、市民福祉につながるかは別のことである。これを考えながら、今後の予算措置も含めやっていただきたい。

<大塚委員>

城下町エリア、H商店街に広げるのであれば、起爆剤になると思う。千歳町に住んでいる方が「私たちには関係ない」と思われている部分も確かにあるので、H商店街の代表者を実行委員会に入れていただき、地元に着して発展していけばよいと思う。

<桂川市長>

千歳町においても関心のある方や応援いただいている方もたくさんいる。しかし、あまり縁がない人がいるのも実情である。千歳町では、自治会長や毘沙門区の方も入っていただいた経過がある。エリアを広げるにあたっては、亀岡地区中部自治会、東部自治会も含め入っていただき、しっかり連携して取り組んでいきたい。

<三上委員>

一定の集中した期間に取り組む芸術祭ではなく、通年での取組だということは理解する。それゆえに事業として見えにくい部分もある。そういった取組であり、一定期間で役割を終えれば終了できると思う。そのような性質の事業だと思うがどうか。

<桂川市長>

一定の段階で、民間を含め連携できれば、我々としては手を離していくことになる。今の段階で、いつとは明確に言えないが、なるべく早い段階で議会に示せるように取り組んでいきたい。

<藤本委員>

霧の亀岡をアピールするには雲海もある。いろいろな所から来られても、ネーミングは霧の芸術祭である。京野菜やマツタケも霧があってできるので芸術の範疇に入ると思う。霧の芸術祭は霧をコンセプトとして表現されているが、参加者はほとんど京都造形芸術大学の学生なのではないか。コラボして、地域に広げていくことも大事であるが、観点が少し違うのではないか。

<桂川市長>

いろいろな芸術祭がある。著名な作家に作品を依頼し、委託料を支払う芸術祭が一般的である。亀岡については、そのような成り立ちではない。それぞれの分野で輝いている方に参加し、協力いただいて成り立っている。藤本委員が言われる芸術祭とは観点が違うと思っている。実行委員会形式で地域の人にも参加いただき実施していることも、この芸術祭の特徴である。霧を1つの象徴として、それを題材に芸術家のネットワークをつくり、そこから今の取組が始まったものである。亀岡市としては、何千万円、何億円というお金をかける予定もない。普通の芸術祭ではなく、斜め上を目指していくような芸術祭であり、結果として人と人との関わりが多く、市民が参加することを重視して取り組んでいくものであるので、理解いただければありがたい。

<福井委員長>

同じような質問と答弁になっているので、特に違う観点での質問がなければ、次に進めることとする。

4 地域交流促進経費（社会福祉費）

<木曾委員>

NPO法人に委託して実施した隣保館デイサービス事業の説明をいただいた。その中で、NPOが独自にお金を出して食材を提供されることについては、

問題ないというように聞こえた。そのことに対しては、いろいろとやり取りをしている中で、見直していく必要があると思う。100%悪いことではないので、マイナスが出るのであれば決算報告をして、市に要求するのであれば要求する。きちんとした形でやらなかったのが、議会から指摘があった。NPOが出したお金なので、関係ないこととして処理するのが本当によいのか。私はそこに問題があると思う。また、プロポーザル方式と言いながら、その方々に同じように、このデイサービス事業を委託することになるのか。市長にプロポーザル方式に変えていただいたが、その部分が本当に生かせるのかという心配がある。

<桂川市長>

木曾委員から指摘いただいたように、特にお金をとってやることに対しては、言われるとおりだと思っている。そのことから、平成29年度までNPO法人であったが、平成30年度からは是正し、昨年度も同じような形で、しっかりと委託料で全体を賄い、取り組んでいただいたという事業報告がある。また、同和事業の関わりから、随意契約で行われてきた。私もそれを是正すべく、去年3月の初めに、NPO法人に対して話をしたが、その時にはすでに全部準備していると言われた。このため、仕方なく来年度からプロポーザル方式、入札方式でやることをはっきりと明言した。そして、今年に入り、具体的にその時期になると、NPO法人から話があったので、私が出向いて、理事長、事務局長と話をし、令和2年度からの受託については、基本的には随意契約ではなく、プロポーザル方式に変えることを明言して了解いただき、今年プロポーザルで行った。その結果、ほかから手が上がらなかった。令和2年度は、公の形の中で募集する。私はいろいろな意味で競争原理は働いていると思っているので、その内容で進めていきたいと思う。しかし、そういう面では、広報の期間が短かったこともあるかもしれない。今まで人権福祉センターは、そのように位置づけられていると多くの市民は思っておられた。そこで活動できないという思いがあったのかもしれない。このため、令和2年度の1年をかけて、市もアピールし、令和3年度からは、より多くの方がプロポーザルに参加いただけるよう、しっかりと啓発していきたいと考えている。私は、一定の是正はできたと思っている。このことは、NPO側も理解していただく中で、今後の取組をしっかりと精査いただけると考えている。

<木曾委員>

指摘があった以降も同じようにデイサービスをやっているが、正直言って同じである。お金をとっていない。それは、確かに言われるように、お金をとらなくてもよかった。私が指摘したいのは、一緒なのであれば、どうしても必要があったのか。何かの理由があってとったのか。それは、どういうお金に変わっていったのかということであり、議会として指摘するのは当然だと思っている。市長としては、今までの分については、なかったことにして、令和2年度からは、きちんとやるので理解いただきたいという話であるのか。そこを整理しないと、また同じことになるかと心配する。私は以前から、NPO法人の運営等に関しては、そこに行っている職員の身分や人権をきちんと守り、健康を害することなく仕事ができる環境をつくるのが非常に大事だと思っている。なしのつぶてになってしまうと、本当に不本意である。市長

が令和2年度以降、そのようなことを一切許さず、NPO法人の入札制度についても短かったので、もう1度やるのであれば納得できる。行政として主体性を持ち、どの団体やNPO法人であろうと、きちんと対応していくのが筋だと思う。そうでないと、行政の公平性や、職員の人権・身分・労働条件を守ることができない。そういうことを踏まえ、もう一度答弁いただきたい。

<桂川市長>

委員が指摘される内容は存じている。平成29年度はお菓子を別費用で賄ったという報告を受けた。それをどこまで信用するかという問題はあると思うが、その時点から現在まで、私も直接、理事長ともやり合い、いろいろな意味で改革が進んできたと思っている。今、亀岡市は隣保館を含め、3館体制で取り組んでおり、それぞれが同じような立ち位置で進めていく必要があると思っている。今までの状況を見ると、あそこは人もすごく多かったこともあり是正して、人員を減らした。その代わりに、よい人材・職員を送り、地元にしっかりと対応していくような取組が進んできた。特に人権福祉センターにおいては、施設専有の話もあり、私も直接パソコンの使い方も含め、公の施設であることや個人の施設ではないことを含め、しっかりと申し入れて認識いただいていたと思っている。この新たな委託制度についても、今までは随意契約として、競争原理のない中でやってきた経過があり、一昨年からは是正するように取り組んできた。令和元年度については、残念ながらそうはいかなかったが、令和2年度からはそのようになるよう、直接話をして取り組んできた。そういう面では、一定の整理がついてきたと思っている。指摘いただく点は多々あり、木曾委員には大変申し訳ないが、疑い出せば切りがない面はあるが、亀岡市としても対応をしっかりと進める。NPOには法人としての立ち位置で取り組むことと、そうでない行政的な部分との線をしっかり引いてやっていただきたいとお願いしてきた。今後も引き続き、しっかりと競争原理を働かせた中で、対応できるように進めていきたい。

<木曾委員>

プロポーザル方式により、どこがされるのかは別にしても、あそこがどのような管理状況になっているのかについて、私は大体想像できる。それを考えたときに、食材が中に入っていたり、器が山盛り入っていたりすると、次の業者がすることは、もうほとんど不可能である。まず、それを是正することからスタートしていかない限り、難しいと思う。市内の料理屋にもないような、すばらしく立派な冷蔵庫や冷凍庫を、市の税金をしっかり投入して整備したので、十分活用できるような形で、市として管理いただくようお願いしたい。

<桂川市長>

指摘いただいたとおり、NPO法人が私物化することにならないよう、亀岡市としてもしっかりと管理していきたい。適宜そういう状況を監視し、指導していくことをお約束申し上げる。

14 : 57

<休憩 14 : 57 ~ 15 : 10 >

15 : 10

5 ふるさと学習推進経費

<石野委員>

京都スタジアムと大河ドラマ館の見学に係るバス運行経費が、当初予算で上がっている。これはどういう形でこの時期に予算計上されているのか。

<神先教育長>

今回、小学校については、全員に大河ドラマ館と日本でも類をみないようなすばらしいスタジアムをじかに見せてあげたいと考えた。さらに、大河ドラマについては、今しか見られないものである。確かに、学校教育においては、学力の向上・保障はすごく大事だと思うが、またとないこのチャンスに、その機会を与えてあげたいという思いがある。予算については、本市のバスを使うこともあるが、大規模校については、観光バス等を導入しなければ回れないので予算計上した。

<石野委員>

2市1町の子どもたち2,000名に、2月9日のスタジアムのこけら落としの試合の切符を配布された。2,000枚では足りないと思うが、学校関係者から、バスを出してほしいという意見が出たのか。

<神先教育長>

先ほども説明したように、そういったことはない。教育委員会としても、子どもたちにチャンスを与える唯一の機会だと思い、お願いしたものである。

<桂川市長>

2月9日にこけら落としされたが、その時は、地元の小学生2,000人に案内を送り、結果として800人が参加した。親を含めると1,600人から申込みがあった。市内の小学生は約4,600人、中学生は約2,000人いるが、その中の一部であったという状況である。

<石野委員>

全員をバスで運ぶと、18校の小学生はまた行けるのか。亀岡市内の児童は、2,000人の内800人しか行っていない。亀岡市のバスを利用し、あとは京阪京都交通を利用して運ぶということである。日程を変えて行けば、それだけ経費を使わなくても、市のバスを利用して行けるのではないか。教育現場と十分に話をさせていただきたいと思う。

<神先教育長>

指摘があったように、柔軟に対応していきたいと考える。

<桂川市長>

市内の小学生の大河ドラマ館入場料を、亀岡の企業から寄附いただくことになっている。民間企業の協力もいただいて、大河ドラマ館へ入場できるとなり、スタジアムの見学とあわせて、大河ドラマ館や、できれば亀岡市文化資料館も一緒に見てほしいと思い、学校にお願いしているところである。そのような形で、この機会にしかない亀岡のものを、ぜひ見ていただければと思っている。

<石野委員>

このような時期であり、学校も、4月以降は過密になり、そのようなところへ行く余裕もないと思うので、本当に教育現場と十分に協議いただきたい。

<福井委員長>

学校の子どもたちが行くことに対して、企業からチケットを協賛いただける

ということである。委員会で審査しているので、きっちりやってもらわないといけない。

<木曾委員>

今、市長から聞いて初めて分かった。この大河ドラマ館のチケットは、招待という形ですべての小中学生に、すでに1枚配布されている。その上に、またこれである。先ほど石野委員が言われた分も含め、子どもたちは、すでにスタジアムのチケットを1枚持っていると思うが、それで間違いないのか。

<神先教育長>

これについては別で、このバス代の予算が計上されているだけである。

<木曾委員>

市としてすべての小中学生に配布したということか。

<福井委員長>

この予算はバス代であるが、小学生すべてに配布したのは、企業の方であるのか。

<桂川市長>

南丹市、京丹波町にはすべて配ったが、亀岡市はこの事業で使うので、配っていない。

<木曾委員>

うちの小学生と中学生の子どもは、すでにもらってきた。私は配ってあると認識している。もう1回ということであれば二重になる。その必要はあるのか。

<福井委員長>

整理していただきたい。整理していただくまで暫時休憩する。

15 : 18

<休憩 15 : 18 ~ 15 : 20 >

15 : 20

<福井委員長>

休憩前に引き続き開議する。

<桂川市長>

私に認識不足の点があった。市内の子どもたち全員が行ける状況にないことを含め、社会勉強の1つとして、新たにバスで子どもたちに教育の場を与えることを考えている。入場料については、減免対応することにより取り組むこととしている。

<木曾委員>

入場券を出してはいけないということではない。例えば、保津川下りが中止になり、すべての子どもにチケットを渡してもらったこともよかったと思う。それと同じように、大河ドラマ館のチケットも、小中学校にすべてに配っていただいてよかったと思う。それにもかかわらず、これが出てきたのでどうかということである。なぜこのような二重のことをするのか。今は、新型コロナウイルスの関係で授業を休んでいる。新学期もどうなるか分からない。このような中で、本当に小学生、中学生のすべてが授業時間に行くわけである。休みのときに行くのではなく、授業の一環として行くという説明であっ

た。そうであれば、優先順位が少し違うのではないか。一旦配ったにもかかわらず、また行くことになる。スタジアムの話もそうである。何かちぐはぐな感じがしてならない。子どもたちには、この大河ドラマ館に関して予算措置できているのでよかったと思うが、なぜ今これが出てきたのか。もう1つは、今、授業時間が非常に厳しい状況であるのに、この時間を割いて行くことが、本当に亀岡の子どもたちのためになるのかということも含め、判断する時期にきていると思う。教育長と市長の判断として、しばらく様子を見て事業執行することにされたほうが、私は賢明だと思うがどうか。

<桂川市長>

今、木曾委員から提案があったように、私の認識と教育委員会の認識に違いがあったというのも事実である。また、新型コロナウイルスが、今後どのように続いていくか分からない状況の中で、子どもたちの学業の時間帯が、大分削減されてきている状況もある。今後の状況を見ながら、最終判断をしていきたいと思っているので、ご容赦いただければありがたい。

<三上委員>

木曾委員に関連して、教育、授業の一環として行く場合については、教育長が答えられた。その答弁では、日本の中でも類を見ない立派な施設、そして今年しかない大河ドラマ館を子どもたちに見せ、体験させたいということはある。このため、1人1枚無料で配ったということだと思う。授業の一環として行く場合には、教育的にももう少ししっかりした目標を持ち、ふるさと亀岡をどう学ぶのかということによってやっていかなければならないのに、今の答弁では、無料で配っただけでよいということにしかならないと思う。ふるさと学習推進経費約5,000万円のうち、わたしたちのまち亀岡の作成経費が、大体1,685万円ということである。亀岡市の小学校教育研究会の社会科の先生が毎年苦勞されて、よいものを作り上げていただいている。総務文教常任委員会でも見てもらったが、非常によい教材だということである。これを全く使っていないわけではないと思う。3・4年生の社会科では、全国的な例しか出ていないので、亀岡のことはこれで学んでいるそうだが、先生はその場所を実際に見に行き、子どもたちにどう伝えるかという時間もなかなか取れない。読んで終わりぐらいにしかなくなっていないのも、実情としてあるようである。個人や学校による差はあると思う。そういう意味でも、学校にいろいろなことが持ち込まれているが、今回、授業時間を半日使って行くよりも、実のある学習になるように、副読本を十分活用することに重点を置かれるべきだと思うがどうか。

<神先教育長>

委員の言われるとおりであり、私もまだまだ浸透していないと感じている。今後、学校としっかり連携をとりながら、わたしたちのまち亀岡が、子どもたちにとって、力に変わっていくような学習環境をきっちりと整えていきたいと思っている。

<三上委員>

委員にも、割と同じような意見をお持ちの方がたくさんいらっしゃるが、この325万4,000円という経費そのものを、柔軟に対応するというより、初めから外してもよいと思うがどうか。

<福井委員長>

それはちょっと質疑に当たらないと思う。また後ほど、分科会や全体会の討論でお願いしたいと思う。ほかに質疑はないか。

<富谷委員>

今回、明智光秀について勉強する機会を与えていただいた。保護者の声としては、教育部がそのチケットを配り、勉強する機会を与えたいのであれば、初めから連れていくべきという考えの方がたくさんおられた。子ども1人分のチケットをもらってもほとんど行かない。自分1人では校区外であり行けない。行ける方はわずかだと思う。子どもは行きたいが、行けないという声を聞いた。教育部や教育委員が1人ずつ本当に学ばせたいという発想であれば、初めから連れていくべきだと思った。そういう市民の声があったことを伝えたい。

<福井委員長>

意見として扱う。

6 環境先進都市推進事業経費

<富谷委員>

新しく観光エコということで、使命を終えたパラグライダーにFLY BAGとして息を吹き込むことは、すばらしい事業だと思っている。市民に説明するために、もう少し詳しく事業内容について説明いただきたい。この資金として、クラウドファンディングで1,000万円という目標を立てられたが、今後も続けられるのか。また、拠点整備をして、この事業で製作し利益を追求していくのか。

<桂川市長>

今年度はクラウドファンディングで1,000万円を目標とし、結果的に2,300万円弱の寄附をいただくことができた。今回はFLY BAG製作の拠点をつくるということで、1回限りのクラウドファンディングであったので、霧の芸術祭に補助を出し、霧の芸術祭の拠点づくりとして整備していく予定である。クラウドファンディングは、基本的にはこれで終わりとなり、今後の予定はない。また、基本的には製作したものを幅広くアピールし販売していく予定であり、目標は1万個製作していきたいと思っている。そこには、福祉に関わる方々に協力いただきながら製作し、新たな雇用を生み出すような取組につなげていきたいと考えている。

<富谷委員>

とても夢があり、マイバッグよりもFLY BAGでアドバルーンを上げれば効果があると思う。すごく派手であり、マイバッグの周知も兼ねて、各店にFLY BAGを掲げてもらおうと効果はあると思う。今後、いろいろなことで利活用していただきたい。また、ワークショップで、市民や子どもを交えFLY BAGを作成されたが、市民からは参加したかったが、1,000円という作成料が高く参加できなかったという声を聞いた。目標が周知であるならば、利益を追求しないので、ワンコインくらいで参加できれば、周知の幅を広げられると思った。1回目が1,000円だったので、その次は500円ということはある得ないと思うが、そのような声があったことを伝えさせていただく。

<長澤委員>

FLY BAGの生産に係る拠点整備補助金について、拠点を運営する補助対象を想定されているのか。

<桂川市長>

予定しているのは、KIRI CAFEの隣に千寿庵という古民家があるが、そこを借用する予定である。

<大塚委員>

1万個くらいを目標と言われた。このFLY BAGの材料は、あそこを飛んでいた古いものを寄附してもらうのか。1つの機体から取れる数は決まっているので、全国で飛んでいるものから寄附を募るのか。

<桂川市長>

全国のネットワークを通じ、使わなくなったFLY BAGを亀岡に提供いただくことで考えている。

<三宅委員>

時期が少しずれてくるので、条例について詳細に聞きたい。

<桂川市長>

シンポジウムについては、一般財団法人自治総合センターの環境保全促進助成事業であり、10分の10の助成金を受ける。100%助成であり、今の予定では世界に誇れる環境先進都市かめおか協議会で、具体的な内容を協議してもらうようにしている。日時、メンバーは決まっていない。現在、調整している。

<藤本委員>

FLY BAGの元となる古いパラグライダーの材料費は無料なのか。また、100万円の作成業務については、どこへ委託されるのか。

<桂川市長>

基本的には捨てられるものをリサイクルするため無料でいただく。運送費等はかかるかもしれないので、こちらが負担しなければならないと思う。また、100万円の委託は、昨年10月20日に行ったFLY BAGの製作と同じような形で実施する予定である。新しく、一般社団法人きりぶえという、受皿となる実行委員会を組織化し委託する予定である。昨年と同じように、ガレリアかめおかで、大きなFLY BAGを切り取る作成プロジェクトを行う予定である。

<小松委員>

条例施行に向けたシンポジウムについて、マイバッグの持ち込みは8割ぐらいである。自治会での説明会では、約8割が理解を示したということだが、逆に言うと2割の人がマイバッグを持ってこない。あるいはその理解ができないということである。例えば、5万人の買物客がいれば、1万人ができないこととなる。シンポジウムには、関心のある人が行くと思う。関心のない人、理解のない人に対しての啓発は、この中でどのように取り組まれるのか。

<桂川市長>

一般的にシンポジウムには、関心を持つ人が多く参加されることを期待している。逆に言うと、関心のない人にどのような形で動機づけするかというのは、これから勝負どころだと思っている。特に、マイバッグ、エコバッグを持っていただく比率を100%に上げていくためには、そういう人たちへしっかりとアプローチしながら、KAMEOKA FLY BAG Project

c tに参加してエコバッグを作ってもらったり、新たにシンボルマークをつくる取り組みで啓発していくこととなる。また、チラシやポスター等も作っていかなければならない。先日もユニクロと締結したが、そういった事業者がたくさん亀岡市内に出てきており、市民に分かるような啓発をしていきたいと考えている。

<三宅委員>

先ほど市長が言われたように、意識の高い方が多く参加されるということだが、捨てる人の意識を変えるための方策として、シンポジウムだけでは心もとない。ポップや看板の費用については、通常費用として見込まれているのか分からないが、意識のない人への啓発がないのはどうか。商業者に対する告知については、大手業者は予算を持っているので簡単にできるので、市として公表することはPRになるが、零細事業者の方からは、こういう取組をしたことを出していくのがよいと思う。シンポジウム予算の内容、内訳について答弁をお願いしたい。

<桂川市長>

約350万円の新たな啓発・デザインの費用を予算化している。各店に協力いただき、亀岡市としてお店のレジ横に広告する看板でお知らせしている。先ほど言ったポスターやチラシのようなものを含め、予算化しサインのようなものを含めて取り組む予定である。

<長澤委員>

シンポジウムの件について、分科会でこの項目を抽出したときにも話したが、シンポジウム以外の様々な啓発事業が必要である。シンポジウムの参加者は、恐らく多くて1,000名くらいだと思われるが、その日やれば終わりではなく、成果自体を広くお知らせするような工夫、例えば、地域再生の取組でも、NHKの教育テレビで放映しているので、いろいろな形で成果自体を広めるような工夫が必要ではないか。意見として申し上げる。FLY BAGについては、今年の1月18～19日に、霧のシンポジウムをガレリアかめおかで実施され、私も2日目に参加させていただき、総合地球環境学研究所の研究者や、仲山副市長のプレゼンテーションを非常に興味深く聞いた。それを、あの場だけでとどめておくのはもったいないという気がした。

<桂川市長>

今後、ユーチューブを含め、動画サイトに投稿することも必要だと思っており、積極的に啓発に取り組んでいきたい。

<平本委員>

KIRI CAFEの隣の千寿庵の事業を進める中で、拠点整備するということだが、具体的にどのような整備をされるのか、もう少し詳しく聞きたい。

<桂川市長>

具体的には、FLY BAGを継ぎ合わせていくためのミシンや、カットソーのような機械、道具類の整備が必要である。会場の内装を大きく変えることについては、あまり予算化できないと思っている。借りるものであり、最終的には返さなければいけない。障がいのある方やひきこもりの方にも参加してもらおう中で、製作していかなければならない。そういう人材にも、費用を使っていく予定にしている。

<平本委員>

分科会では、亀岡市はFLY BAG事業を最終的には手を離す方向であることを聞いている。そこまでの事業展開をどのように描き、いつ頃をめどに最終終着点に持っていくのか、もう少し明確に答えていただきたい。

<桂川市長>

FLY BAG事業は、基本的にクラウドファンディングでいただいた寄附を活用していくものである。そのお金を霧の芸術祭実行委員会に補助し、取り組んでいただく。今の予定では長くても2年、できれば1年で販売できればと考えている。1つ5,000円くらいで売れるという専門家の意見がある。実際どうなるかについては、つくってみなければ分からないが、そのような意見もあるので、なるべく事業としてやっていただくことを目指す。長くても2年くらいの応援になると思っている。

7 子ども・子育て支援経費

<平本委員>

子どもの権利条例については、特別に思い入れがある。体制としては、以前から全庁の取組として、教育、福祉、各種団体、有識者とプロジェクトチームをつくるということであるが、もう少し具体的に、どの課が何を担当して、どう連携していくかについて聞きたい。

<桂川市長>

亀岡市として、1つのプロジェクトチームをつくる。これは行政施策で運営していくためのものである。また、現場において、子ども食堂をやっている人や、子どもの貧困に関わるような取組・相談をされている有識者の方々にも参加いただく中で、市民協働型でいろいろな意見を提案いただく組織をつくる必要がある。そのダブルスタンダードの中で、子どもたちの現状を浮き彫りにし、行政サイドでは調査やアンケートを実施しながら、具体的にどのような施策につなげていけばよいかを考える。有識者の方々からは、現場の声を聞く中で、施策にどうつなげていくかということは今後検討していきたい。

<平本委員>

以前から質問しているように、どこの先進地でも庁内での横の連携が一番ハードルが高いということである。個人情報の兼ね合いと情報共有が非常に難しいことも聞いている。例えば、教育、福祉、建築住宅とも連携をとられるということだが、どういう形で情報共有されるのか。

<桂川市長>

今後、具体的にチームをつくる中で、それぞれの現状把握とともに、その事象において必要な施策をどうとるかということ、各担当課から意見を出す中で、精査していくことになる。子どもの貧困というよりも、親の子どもに対する取組や環境が大きく影響することも含め、子育て支援課や教育部門が中心になる。また、住宅の問題については、建築住宅課が関わることになると思う。施策に応じて、状況は変わってくると思っている。

<平本委員>

今、教育、福祉という話であったが、庁内でこのオペレーションを誰が一番引っ張り、コントロールされるのか。

<桂川市長>

基本的には、こども未来部長を中心に、組織化を進めていきたいと考えている。

<小川委員>

子どもの貧困対策として予算が上がっている。今まで議会も貧困対策として、いろいろと検討してきたこともあるが、子どもを取り巻く環境は、まだ非常に厳しい。令和2年度にプロジェクトチームをつくるが、計画策定業務委託料260万円は、どのような形で委託して進めていくのか。

<桂川市長>

1つは、プロジェクトチームの議論で浮き彫りになった現状調査について委託する。調査と分析、そして有識者の意見を交えた中で、今後の亀岡における貧困対策をどのように進めていくかということ、計画に入れていきたいと考えている。

<小松委員>

いよいよプロジェクトチームが始まるという期待感に燃えている。先進地を見てみると、一番大事なところであるが、どうしてもネックになるのが教育部との連携である。そこからの情報はかなり重要だと聞く。1つの壁は、子どもたちの学校から、個人情報なかなか出しにくいことであるが、その壁はどう取り崩すのか。どこまで出せるかについては、これからだと思うがどのように考えているのか。

<桂川市長>

個人情報の壁はあると思う。プロジェクトチームの中では、そういうことを踏まえて協議していかないと実情を把握できない。だからこそ、行政側のプロジェクトチームと、民間サイドの有識者のプロジェクトチームがある。行政サイドとしては個人情報の漏えいを含め、厳しく精査できると思うが、民間においてはその担保が難しい。そこをしっかりと精査しながら、取り組んでいきたい。そういう意味では、行政側がしっかりと個人情報を含め管理していける体制をとっていく。

8 農業担い手づくり育成事業経費

<赤坂委員>

農業担い手づくり育成事業については、毎年同じ予算であるが、結局担い手が育っていない。農業は、今本当に大変な状態である。どこの自治体でも小規模ばかりである。亀岡の場合は、米を作ってもなかなか採算がとれない。採算がとれない中で、担い手マネージャーの報酬は安い。結局、今のままではやっていけないので、花、果物、野菜のコンサルタントを入れている。安城市で花を作っていたが、農家が花に変えていくのが大変で、社長がボランティアで、あちこち教えて回っていた。そして、ハウスを建て、今では花の産地になっている。全部、花にすべきと言っているわけではない。霧もあり、農家はずっと同じものを作ってきた中で、ほかのものを作るのは非常に怖い。私もいっぱい作っていたのでよく分かる。もし天候が悪ければうまく育たず、そのときに負債を抱え、どうやって生活していくのかということになる。そういうことがないように、コンサルタントがいる。そういうところに、しっかりと金を使うべきである。財政難であるが、一番大切な時期であり、しっかりとお金を入れて、人を育てていただきたい。

<桂川市長>

指摘のとおり、現在、小規模農家や新規就農者、また、1人でやっている方々に対する農業の補助制度はないが、国は、大規模化には大きな補助を出している経過がある。亀岡の現状としては、農業法人でやっているところもあるが、多くは1人で野菜等を作っている方が多い。そういう方々から、1人生産者に対しての補助制度が全然ないという要望・指摘をいただいた。問題は何か基準をつくらないと、補助することもできないということである。耕作面積をどのくらい増やし、年収、生産高を上げることを目標にすることに対して補助していく。一番の問題は、機械への投資ができないことである。コンサルタントが一定評価し、生産者にはこういう機械により、これだけ耕作面積を増やすことができる、また、収入を得ることができるという判断の下に、連携して進めていけば、亀岡の小規模農業者や新規就農した方々を応援することにつながる。もう1つは、地域の特徴として、どういう農作物がよいかという話である。最近、亀岡市内にイチゴ農家が2軒ほどできたが、それなりの計画の下でやっていただいている。そういうことを含め、しっかりとリサーチし、地域のニーズにあったものをどう作っていくかということである。付加価値の高いものをどう作るかということも、まさにコンサルト的な指導者が必要だと思う。今年度においては、マネージャーを設置することを含め取り組んでいく。亀岡にとって、小規模、個人の方を含めた応援制度を、どのようにつくればよいかを検討する中で、補正も含め、実態にあった農業者のかゆいところに手が届くような制度をつくって応援していくように考えている。

<赤坂委員>

農家をしっかりと助けてほしい。ぜひよろしく願います。

<桂川市長>

野菜はふるさと納税制度の返礼品として、大変注目いただいている。亀岡市としても、そういうことを応援することにより、返礼品に活用できることもある。ギブ・アンド・テイクで、しっかりとやっていきたい。

<田中委員>

今年の予算にも、農の担い手新規就農支援事業、農業次世代人材投資資金が計上されているが、3月議会では、この部分が減額補正になっている。それ以上の要望があるくらいやらないと、本当に担い手や新規就農が育っていかないと思うがどうか。

<桂川市長>

担い手が育つためには、そういったインセンティブが必要だと思う。そういうものをしっかりと明示することによって、新たにやってみようという人も増えてくるので、今ある予算が足りないのであれば、補正も含めて考えていきたいと思う。

<奥野委員>

集落営農育成強化助成事業323万円について、もう少し具体的に聞きたい。

<産業観光部長>

集落営農育成強化助成事業は、地域の農家組合等の組織に対し、草刈作業を集団でやっていただいた際に助成金を出すものである。

<奥野委員>

それは組織をつくっていただいで助成するのか、組織をつくるために助成するのかどちらか。

<産業観光部長>

現在、予算上の対象としているのは10組織である。

9 林業担い手育成事業経費

<赤坂委員>

あちこちでまだ木が倒れている状態である。防災の観点から考えると、二次被害になる恐れがある。担い手の給料が安すぎて、建設業でもなかなか人手が足りない状態である。安くて、しんどいということがある。人手が足りておらず、できるだけ早く人件費を上げて、二次災害が起きないようにすべきである。昔のように山師がないので、前回、前々回の台風被害がまだ残っており、できるだけ目の触れるところは、お金をかけなければいけない。そこから担い手になるようなシステムに持っていければよいと思う。できるだけ山の保全をしていただきたいと思うがどうか。

<桂川市長>

森林組合も人の段取りが大変難しい状況にある。今は、一昨年台風で倒れた保津峡ののり面を、森林組合にやっていただいている。それで、もう手いっぱい状況である。亀岡市が今、ほかのところに依頼しても、すぐにできない状況にある。そういう意味では、現状としてマンパワー不足があると思う。そういうことを少しでも回避して、林業に携わる人を増やしていくための担い手支援である。台風21号や一昨年の豪雨を含め、至るところで倒れた森林が整理できていない状況にある。亀岡市も森林環境税を含め、税金によって復旧に向けて取り組んでいるが、問題は山の所有権である。所有者が分からず、手をつけられない状況もある。それとあわせ、林道をふさいでいるので、災害につながらないように、優先順位をつけて、復旧に向けた取組を進めようとしている。この間も進めてきたが、全体的にマンパワー不足が問題になっているので、令和2年度は引き続き、約1,700万円の森林環境税を、国、府からいただくことになっており、活用しながら、優先順位をつけて進めていきたい。また、国が森林経営管理制度を創設したので、それに向けた取組も今年度は進めていきたい。森林台帳を整備し、所有者を含めた状況を把握する調査費用を予算化しているところである。災害のきっかけにならないように、いち早く取組を進められるようにしていきたい。

<赤坂委員>

結局は、人の募集の仕方だと思う。待っていてもなかなか来ないので、霧の芸術祭で募集する等、森に入るのは楽しいと思ってもらい、そこから担い手になっていく可能性もある。ボランティアから担い手になっていくという形も1つの方法だと思う。

<木曾委員>

毎年、亀岡市の林業振興協議会で先進地視察に行っている。そこでいろいろなことを聞いている。担い手の部分も含め勉強しているはずである。それが全然生かされていないことは非常に残念だと思う。先進地視察をとおして、担い手をどう育てるかについて吸収し、この予算に反映する考えはあるのか。

<桂川市長>

先進地視察を毎年行っており、報告を受けている。それに基づいた予算も上げている。木材にそれなりに特徴があれば、林業で収入が得られる。そういう面で、亀岡の場合は木材だけで勝負できる環境にはないということである。行政が環境を整備するとともに、森林を守る取組を進めていかなければならない状況にある。森林組合だけでは到底、賄いきれない状況があるのも実情である。今後、市内の建設業者が実際に山に入り、できるかどうかという、大変難しい点はある。そういうところに委託することも見据えて、考えていかなければならないと思う。

<田中委員>

今年の予算でも、林業費全体が金額的に非常に少ないというのが第一印象である。多いのは鳥獣対策事業経費が2, 200万円余りで、全体としてはこの部分が大きいと思う。これから森林、山林を守っていくのは、環境保全の面や防災の関係からも、非常に大事なことだと思う。木材を売るのではなく、環境保全、災害防止の視点から、山林を大事にしていきたいと思う。また、木材が輸入自由化になって以来、山に入れば入るほど赤字が出るという状況であり、これを変えていくために、亀岡市としても京都府や国に、林業施策の抜本的な改革を求めている。

<桂川市長>

国の制度として、森林を守っていく取組を、より一層強めていかなければならない。そういう面で、国に対してもしつかりと要望したいと思う。真庭市に視察に行ったが、バイオマス発電を実施されている。特に木材発電をされており、材料、木材としての取組により、山が活性化している状況を聞いた。それは亀岡市だけでできるような森林の状況ではないことを考えると、バイオマス発電を含め、京都府にやってほしいという思いを持っている。倒れたような木でも、亀岡から材料を提供し、お金に換えられることもある。新たに山が見直され、そういう取組につながっていくと思う。災害の状況を見ると、間伐をしている関係で、流木がどんどん山から川に流れており、それがダムにたまっている。その費用だけでも、京都府は、年間数千万円から1億円近い金額を出していると思う。そういうものも燃料に換えていくような取組を含め、この京都中部の広域においてバイオマス発電ができれば、いろいろな意味で山の活性化につながっていくと思う。倒れた木を切り、お金になれば、それなりに進んでいくと期待している。そのことも含めて、要望していきたい。

<福井委員長>

以上で質疑を終結する。

2 その他

<事務局長>

この後、各分科会において委員間討議、討論、採決等を実施していただく予定である。

<福井委員長>

各分科会委員長は、分科会での採決等をよろしくお願ひしたい。次の全体会は明日17日、午後1時30分から開催し、全体会としての採決等を行う。本日はこれで、予算特別委員会全体会を散会する。

1 6 : 1 6